

# 青少年の学校生活と学習観

## —日韓中高生を対象とした質問紙調査をもとに—

青山学院大学 小澤 昌之

### 1. 研究の目的

本発表では、授業観や学校生活のように、日韓中高生における学校生活の実情を比較しながら、学校生活への適応を促す要因について、日本と韓国で行われた調査データをもとに考察する。

2000年代以降の学校文化研究においては、日韓比較調査を中心に先行研究が蓄積しており、1990年代から学校生活と学歴・社会階層などの社会経済的地位との関連性をもとにした分析が進んだ。

藤田・熊谷(2002)によれば、中高生における成績の高さが、日韓ともに学校適応を促すこと、韓国では出身階層が高いほど学校生活の適応を促すものの、日本では階層と学校適応の関連性が見られないことが判明した。また、韓国の中高生では、社会化関係要因と学校適応要因との関連性に関して確認されている(熊谷 2008, 趙・松本・木村 2011など)。日本の中高生の場合は、学校や教師に対する普段の行動や家庭的背景(古田 2012)、学級内での友人関係に対する満足感(松下・石津・下田 2011)が学校適応感に影響を及ぼすとされている。

先行研究における議論から、日本と韓国の中高生は学校生活だけでなく、教師の接し方や学習観などにも違いがみられた。その違いの背景にある規定要因を分析するため、本発表では日韓中高生の学校適応に影響を及ぼす要因について検討する。

### 2. 研究の方法

使用するデータは慶應義塾大学 YES 研究会が 2009 年 11 月～2010 年 3 月にかけて、日本と韓国で実施した「第 2 回青少年の生活についての調査」である。日本では住民基本台帳をもとに無作為に抽出した東京都に住む中学 2 年～高校 2 年生の生徒、韓国における調査は、韓国統計局の人口統計(2008 年度)に基づき、ソウル特別市行政区の無作為に抽出した中学 2 年～高校 2 年生の生徒を対象に実施したものである(有効回答数:日本は 711 人、韓国は 771 人)。

### 3. 分析結果及び考察

学校で重視する観点に関しては、韓国の中高生は予習・復習面などの学業面、日本の中高生は校則や学級のルールなど学校生活面と違いがみられた。教師関係については、日本の教師は、いかに生徒を授業へ関心を引き付けるのかといったコミュニケーション能力、韓国の教師は、公平・公正にかつ授業内容をいかに生徒にわかりやすく教えるのかという技術が問われていると考えられる。

次に、日韓中高生の学校適応に影響を及ぼす要因に関しては、社会階層要因は一部を除き学校生活にあまり影響を及ぼさないことが判明した。但し韓国は、授業・学校適応の両尺度とも、出身階層要因の父学歴だけでなく、社会化関係項目の父親・母親関係尺度が影響を与えていた。したがって、韓国の中高生にとっては、親の社会経済的地位が高く、親との関係が充実なほど、学校生活に対するコミットメントが促進される可能性があると考えられる。

日本では、長時間の受験勉強を必要とするコースに進学する生徒も多いものの、受験勉強のために多くの時間を割く必要のない高校生も少なくない。また韓国では、高校で夜遅くまで学校の教室で受験勉強をするという習慣があるように、学校生活より授業理解を優先する価値観が支持されていることが影響しているとみられる(馬居他 2004)。このことから、学校成績の高さの程度が学校適応を促すモデルが現在も依然として存続していると考えられる。